

9月30日 狭山ロータリークラブ

武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部
佐々木 隆

「紅茶について——中国・イギリス・日本——」

内容

私と紅茶（簡単な自己紹介）	2
（参考資料1） 茶：中国から世界へ	3
（参考資料2） イギリスの紅茶史	5
（参考資料3） 日本の紅茶史	10
（参考資料4） 参考文献	12



私と紅茶（簡単な自己紹介）

私はもともとシェイクスピアを中心に、イギリス文学・演劇がどのようにして日本に入ってきて、それをどのように日本人が受け入れるようになったかといった文化交流、比較文化を中心に研究してきました。2004年4月に武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部が開学しましたが、大学には日本総合研究所という研究機関があり、昨年はその中で「お茶を通した日常コミュニケーション」をテーマにして私自身は「イギリスにおける紅茶文化の一考察」を研究、発表致しました。今回の講演は昨年の研究を踏まえて、さらに日本への紅茶受容史なども意識した内容と致しました。

略歴

1960年生。駒澤大学大学院人文科学研究科英文学専攻博士後期課程修了。博士（英文学）。武蔵野短期大学国際教養学科教授を経て、現在、武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部教授。担当講義は「英米文学史」「国際文化交流」「西欧文化事情Ⅰ」等。

(参考資料 1) 茶：中国から世界へ

「茶」という言葉の伝播

広東語 ch'a 系 (陸路)

cha, chai, tchai, chay など日本語、ポルトガル語、ヒンズー語、ペルシャ語、アラビア語、ロシア語、トルコ語へと伝播。

福建語 tay(te)系 (海路)

tay (te), thee, tee, tea, the などオランダ語、ドイツ語、英語、フランス語へと伝播。

英語辞典で最も権威のある *The Oxford English Dictionary* には次のような記述がある。

tea(ti:) The original English pronunciation (te:), sometimes indicated by spelling tay, is found in rimes down to 1762, and remains in many dialects; but the current (ti:) is found already in the 17 th c., shown in rimes by the spelling tee. (*OED*. Vol.XVII, pp.684-686)

1.=Bohea tea. The name was given in the beginning of the 18th to the finest kinds of black tea; but the quality now known as 'Bohea' is the lowest, being the last crop of the season. (*OED*. Vol.II, p.361.)

緑茶：不発酵茶（西湖龍井・碧螺春・黄山毛峰など）

白茶：弱発酵茶（白牡丹・白毫銀針など）

黄茶：弱後発酵茶（君山銀針・霍山黄芽など）

青茶：半発酵茶（武夷岩茶・安溪鉄観音・凍頂烏龍茶など）

紅茶：完全発酵茶（川紅工夫・英徳紅茶・キーマン紅茶など）

黒茶：後発酵茶（六堡茶、雲南七子餅茶・プーアル茶など）

(参考資料 2) イギリスの紅茶史

1559年 ジャン・バテスタ・ラムジオ『航海記』(ペルシャ人からお茶の事を聞いたという内容。おそらく、緑茶のこと)

*ヨーロッパにおける最初の茶の記述。

1610年 ヨーロッパに茶が伝わる。このときの茶は「緑茶」であったようだ。

1613年 平戸のイギリス商館滞在のリチャード・ウィッカムの手紙によると、「ミヤコで上等のお茶一壺」を買ってくれるようにとの依頼の手紙を書いた。「上等のお茶」とは抹茶であったと推測される。

1658年 『マーキュリアス・ポリティカス』(*Mercurius Politicus*)に世界最初の紅茶の新聞広告。

“ That Excellent, and by all Physitians approved, China Drink, called by the Chineans, Tcha, by other Nations Tay alias Tee, is sold at the Sultanese-head, a Cophee-house in Sweetings Rents by the

Royal Exchange, London.”

「中国人によって『チャ』ほかでは『ティ』とも呼ばれ、すべての医師から折り紙をつけられた素晴らしい中国の飲み物が、王立取引所の近くスイーティング・レーンにあるサンタネス・ヘッド・コーヒー・ハウスで売られております。(出口保夫訳)

- 1660年 トーマス・ギャラウエイ、紅茶を宣伝。
- 1662年 チャールズ2世とポルトガル、ブラガンザのキャサリン王女の結婚(キャサリン王女、ヨーロッパの紅茶の習慣をイギリスに伝える)
- 1665年 トーマス・ギャラウエイで紅茶の売り出し(OEDの例文に記録がある)
- 1706年 トワイニング、ロンドンに「トムズ・コーヒー・ハウス」を開店。(一般市民への紅茶の販売。当時、コーヒー・ハウスは女人禁制)
- 1717年 トワイニング「ゴールデン・ライオン」開店。(女性向けの紅茶販売店)

- 1740年 ダンカン・フォーブスの手紙（トウイデール卿宛）
「紅茶はいまではごくあたりまえになりました。それで、ごく貧乏な労働者家庭でも、朝は紅茶で食事をします」（出口保夫訳）
- 1750年 ラネラ・ティ・ガーデン改装。1000個のランプを設置。
- 1750年 トーマス・ショート『紅茶、砂糖、ミルク、ワイン、酒、パンチ等に関する論説』
* イギリスで最初の紅茶に関する医学的見解（紅茶を推奨）
- 1756年 ジョナス・ハンウェイ『紅茶論』
* 紅茶は有害という説。
- 1756年 ウェッジウッド、シャーロット王妃より紅茶ポット、スプーン、紅茶カップなどの注文を受ける。（王室御用達となる）
- 1759年 ウェッジウッド、独自の新しい工房を開く（カリフラワーウェア）
- 1770年 ジョサイア・スポード、陶器工場を開く。
- 1772年 ジョン・コークリー・レットスン

『紅茶の医学的特徴と飲茶の効用に関する
考察』

＊ 紅茶を推奨

- 1 7 7 3 年 ウェッジウッド、ロシアの女帝カ
テリーナから「ディナー・セット」総数 952
点の注文を受ける。
- 1 7 8 4 年 紅茶税の引き下げ
- 1 7 9 0 年 ベッドフォード公爵七世夫人、ア
ンナ・マリア、アフタヌーン・ティーの習慣
を普及させる。
- 1 7 9 3 年 トマス・ミントン、ミントン社設
立。
- 1 8 0 2 年 tea garden の用例がある（O E D
の例文に記録がある）
- 1 8 3 0 年 C . A . ブルースがインドのアッ
サム地方で茶樹を発見。
- 1 8 3 4 年 紅茶貿易の自由化。
- 1 8 3 6 年 ジョン・フランシス・ディヴィス
『中華帝国とその住民たちの出版による挿絵
入り』
- 1 8 4 0 年～42年 アヘン戦争

- 1847年 ロバート・フォーチュン『三年間に亙る中国北方諸省遍歴記。茶・絹・木綿産地への訪問を含む。中国人の農業、および園芸、新植物等についての報告付き』（『遍歴記』）
- 1848年 サミュエルズ・ボール『中国における茶の栽培と製造』
- 1852年 ロバート・フォーチュン『松羅山と武夷人を含む中国の産茶地域の旅、ヒマラヤ山脈中の東インド会社の茶園についての小記付き』（『茶区訪問記』）
- 1857年 ロバート・フォーチュン『中国人の間での滞在。内陸で、海岸で、そして海上で。1853から1856年に及んだ第3次訪問の間における諸事件と冒険の物語。多くの自然の生産物および美術作品、養蚕その他についての覚え書きを含む。目下の戦争についての提案つき』（『中国人の間での滞在』）
- 1869年 スエズ運河開通。これにより中国とイギリスは60日間の短縮。ティー・クリッパーの衰退。

(参考資料 3) 日本 の 紅 茶 史

- 1 7 9 1 年 大黒屋光太夫一行、11月1日に女帝エカテリーナ2世の宮廷でのお茶会に招かれる。(日本人が紅茶とであった最初の記録と言われている。現在、11月1日は紅茶の日と定められている。この時のお茶は欧風紅茶 tea with milk といわれている。)
- 1 8 6 8 年 『万国新聞紙』(5月上旬号)に「紅茶」(ルビは「べにちゃ」)が登場。
- 1 8 7 4 年 政府は『紅茶製法布達案並製法書』を府県に配布。
- 1 8 7 5 年 政府が清より技術者を招き茶技術伝習を行う。多田元吉を中国に派遣。
- 1 8 7 6 年 政府が多田元吉をインドへ派遣。
- 1 8 7 7 年 多田元吉帰国し、高知県下でインドでの伝習製法を試し、紅茶5000斤を輸出。
- 1 8 7 8 年 政府、『紅茶製法伝習規則』を發布し、各県に紅茶伝習所を設置。
- 1 8 7 8 年 多田元吉編注『紅茶説』勸農局、

多田元吉『紅茶製法纂要』（上下）

- 1881年 日本紅茶製造業者が合同し、横浜紅茶KKを組織。
- 1883年 茶業組合中央会議所を結成。
- 1887年 日本に初めて紅茶が輸入される。
- 1906年 東京・京橋の明治屋がはじめて、リプトン紅茶を輸入する。
- 1932年 国産紅茶第1号、日東紅茶発売。
- 1942年 紅茶卸商業組合設立。
- 1977年 紅茶輸入自由化。
- 1983年 日本紅茶協会、11月1日を「紅茶の日」と定める。

(参考資料 4) 参考文献

- 日本橋須原屋茂兵衛『紅茶製法書』日本橋須原屋茂兵衛、1874年
- 内務省勸業寮『紅茶製法書全』内務省勸業寮、1874年
- 哥羅尼爾摩尼／多田元吉評注『紅茶説』（4冊）中溝熊象、星野松蔵、1878年
- 多田元吉編『紅茶製法纂要』（2巻）中溝熊象、星野松蔵、1878年
- 大橋協平編『烏龍茶紅茶傳習所報告』大橋協平、1891年
- 斉藤禎『紅茶読本』柴田書店、1975年
- 荒木安正『紅茶技術講座』柴田書店、1977年
- 全日本紅茶振興会『紅茶百年史』全日本紅茶振興会、1977年
- 村井康彦『茶の文化史』岩波書店、1979年
- 角山栄『茶の世界史』中央公論社、1980年
- 出口保夫『英国紅茶の話』東京書籍、1982年
- 出口保夫『午後は女王陛下の紅茶を』東京書籍、1985年

- 相松義男『紅茶と日本茶：茶産業の日英比較と歴史的背景』恒文社、1985年
- 春山行夫『紅茶の文化史』平凡社、1990年
- 出口保夫『四季の英国紅茶』東京書籍、1992年
- 出口保夫『英国紅茶への招待』P H P 研究所、1993年
- 小池滋他『紅茶の楽しみ方』新潮社、1993年
- 相松義男『近代世界における紅茶の生産と流通』日本紅茶協会、1994年
- メイトランド／井ヶ田文一訳『絵で見るお茶の5000年——紅茶を中心とした文化史』金花舎、1994年
- 荒木安正『紅茶の世界』柴田書店、1994年
- 『私の英国物語——ジョサイア・ウエッジウッドとその時代』講談社、1995年
- 成美堂出版編集部編『紅茶の事典』成美堂出版、1995年
- オーウェル／小野寺健訳『一杯のおいしい紅茶』（改装版）朔北社、1995年
- 出口保夫『午後は女王陛下の紅茶を』中央公論社、1996年

- 日本紅茶協会編『現代紅茶用語辞典』柴田書店、
1996年
- 滝口明子『英国紅茶論争』講談社、1996年
- 磯淵猛監修『紅茶ハンドブック』池田書店、1996
年
- 指昭博編『生活文化のイギリス史——紅茶から
ギャンブルまで』同文館出版、1996年
- 矢沢寿彦『グリーン・ティーとブラック・ティ
ー』汲古書院、1997年
- 仁田大八『英国紅茶の館』東京書籍、1997年
- 出口保夫『英国紅茶の話』PHP文庫、1998年
- 出口保夫『英国紅茶への招待』PHP文庫、1999
年
- 松下智『アッサム紅茶文化史』雄山閣出版、1999
年
- 出口保夫『アフタヌーン・ティの楽しみ』丸善、
2000年
- 磯淵猛『二人の紅茶王——リプトンとトワイニ
ング』筑摩書房、2000年
- 出口保夫『四季の英国紅茶』中央公論社、2000
年

出口保夫『ロンドンの朝は紅茶で明ける』P H
P 研究所、2000年

荒木安正『紅茶の世界』（新訂）柴田書店、2001
年

三谷康之『イギリス紅茶事典』日外アソシエー
ション、2002年

荒木安正、松田昌夫『紅茶の事典』柴田書店、
2002年

大石貞男『日本茶業発達史』（大石貞男著作集1）
農山漁村文化協会、2004年